

保育者養成校における総合表現活動の取り組み

—「ミュージカル」の授業実践を通して—

内山 尚美
東海学院大学短期大学部

要 約

保育の現場や保育者養成校において、音楽劇やオペレッタ、ミュージカルなどの総合表現活動が多く行われている。保育の現場で求められる音楽能力は、子どもたちの音楽表現のサポートをする力であろう。しかし保育者養成校における音楽関連科目は音楽知識や音楽技術を身に付けさせることが中心で、音楽表現にまで至らないという現状があるのではないだろうか。そこで本稿では「ミュージカル」の授業実践を通して、保育者養成校における表現力育成を追求していく。

キーワード：音楽表現、ミュージカル、保育者養成

1 はじめに

保育や幼児教育の現場でよく耳にする子どもの歌声は、声を張り上げたり、時には怒鳴っているような歌い方が多いと感じる。その理由について細田（1995.p.189）は七つの要因を挙げている。その要因の一つは『保育者の「大きな声で」「元気に」という言葉かけに子どもが答えようとした結果』であり、もう一つは『保育者が「美しい響きの声」に対する具体的なイメージを持っていないこと』である。

一般に幼児に好まれる音楽は、明るくリズムカルで、言葉やリズムの心地よい繰り返しなどである。そのため、保育の現場で用いられる楽曲にはテンポの速い曲が比較的多く、拍子については単純拍子が大半を占める。しかしすべての音楽が前出の「大きな声で」や「元気に」という表現に適するわけではない。

筆者の担当する音楽関連科目の授業を通して強く感じられることは、ピアノ演奏や童謡弾き歌いなどの場面で、音楽を「表現」ということに対する学生の意識の低さである。その最も大きな理由は、保育者養成校の学生にはピアノ初学者が多いことが挙げられる¹。入学半年後に実施される幼稚園教育実習に向けて、ピアノ演奏のための基礎技術を身に付けることで精一杯だという事情がある。かれらの楽曲の表現は、強弱、slur、staccato等の段階で滞っており、子どもの音楽や子どもの歌に対する「解釈」や「表現」にまで及んでいない。音楽を通して自己の内的世界を表現するためには、楽器演奏技術や歌唱技術及び音楽基礎知識が重要であり、それらの技術を身に付けて、初めて自己の内的世界を自由に「表現」できるようになるのである。

しかし、保育者養成校に入学する学生の多くは、一般に音楽や歌が「好き」と感じている者が多い。このような条件および状況を踏まえ、保育者養成校の音楽教育に求められる課題を以下の三点に整理した。

- ・学生の音楽に対する「好き」という気持ちを最大限に生かす。
- ・短期間で保育の現場で即戦力として活用できるだけの音楽技能・技術を身に付けさせる。
- ・子どもの音楽表現を引き出すために、学生自身が音楽表現の楽しさを十分に体験する。

このような課題を満たすために、本研究では音楽関連科目を次のように構成した。まず、学生自身の音楽的感性を高め、技能を身に付けるための授業群と、子どもの歌・子どもの音楽の指導法を身に付けるための授業群を充実させることである。

しかしこの授業群だけでは学生自身の「好き」という気持ちを生かし、音楽的な感性を十分に引き出すには不足を感じる。そのため技能・技術の訓練と表現の殻を破る体験を同時に充足するようなミュージカルの授業を構想した。このミュージカルの授業では、保育の現場で必要とされる基礎的な音楽知識や音楽技術を身に付けた上での主体的な音楽表現力を育むことが目的である。そのため次のような視点で、保育者養成校における表現力育成を追求する。

- ①ミュージカルに必要な基礎歌唱法を重点的に指導する。
- ②学生が持つ羞恥心や限界といった「殻」を破らせることで、主体的に表現する醍醐味を味わわせる。
- ③自分の渾身の表現を他者に披露することで、観客から返ってくる感動のエネルギーを体感させる。

2 保育者養成校における総合表現活動

2-1 総合表現活動の教育効果

保育の現場における総合表現活動の先駆けは唱歌劇であるといわれている。唱歌劇は広島高等師範付属小学校訓導の山本壽と同校理事の鯉坂國芳によって、大正8年に催された学芸会で初めて披露された。山本は唱歌に劇的動作を取り入れ、芸術性を深めた「唱歌劇」によって、子どもたちの情感を育てようとした(升田、2015)。

保育者・教員養成校における総合表現活動としての授業科目の目的は、表現力の育成であることが多い。しかしその教育的効果の報告や研究では、表現技術の習得や向上に関するものだけに止まらず、人間的成長に関する記述が多い。

福井・太田垣(1998,p.71)は「自己表現力の獲得、正常な人間関係の構築、感動体験の提供、これらがミュージカル教育の軸であり、教育における重要な今日的意義」と述べている。望木(2010,p.39)は保育者養成校における創作ミュージカル活動は学生にとって「将来の保育者という立場にとどまらず、大きな財産をもたらした」と、ミュージカル活動で得られた教育的効果の持続性を強調している。また時得・小町谷(2009,p.252)は、子どもが総合表現活動を通して『新しい表現を創造するよさ』を認識すると共に、今後の生活に生かしていく表現力についても気付くといった多面的で長期的な視野に立った学びを形成している」と述べている。筆者(内山、2014)は、磐田こどもミュージカル²の活動事例を調査・分析した結果、ミュージカル活動を通して育まれる力は「表現技術力の獲得・向上」と「人間的成長(他者認識力と自己認識力、自己肯定感による自信、伝える力・コミュニケーション力)」の二点であることを確認した。そして文部科学省によるコミュニケーション教育推進会議で報告された「子どもたちの芸術表現体験」を通して得られる教育的効果も同様の結果³を示している。

このように総合表現活動は幅広い年齢の学習者にとって、その年齢に応じた多様な教育効果が確認される。

2-2 保育者養成校におけるミュージカルの取り組み

保育者養成校における音楽劇やオペレッタ、ミュージカルなどの総合表現活動は、学生自身の音楽基礎技能や表現力育成、子どもへの音楽教育方法の習得を目的として、1970年代半ばから1980年にかけて実践が広がった。その背景には1956年、第一次幼稚園教育要領において6領域(健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画制作)が指定され、保育の現場に「音楽リズム」のための総合表現活動が定着したことがある。そのため子どもの音楽劇の指導ができる教員が必要となり、保育者養成校

において総合表現活動が広く行われるようになった。また同時期に劇団四季や宝塚歌劇団のヒット作品によるミュージカル人気の高まりも一つの背景として考えられる(山本、2009)。その後も多くの保育者養成校において、音楽劇・オペレッタ・ミュージカルなどの総合表現活動が行われている。ミュージカルという総合舞台芸術は、人間の文化のほとんどの領域を包含しているため、それを教育手段として用いるとき、幅広い教科に関連した総合的な教材として非常に有効である(福井・太田垣、1998)。

保育者養成校における総合表現活動は授業科目としての実施例が多く見られる。奥(1984)は、学生個々の表現力育成のために「音楽リズム」の授業の中で、ミュージカル創作を取り上げてきた。また、紙屋(2003)は、幼児における表現の意義やその活動における保育者の指導法を考える一つの指針として「保育内容の指導法」の授業において、子どもミュージカルに取り組んだ。望木(2010,p.31)は、「保育内容(総合実践演習)」の授業として創作ミュージカルを行っている。その意義は「保育者に必要とされる5領域全てを網羅した総合的な演習となりうる」ゆえである。

そして課外活動から授業科目へ移行した例もある。土門・山田(2006)は、感動体験の重要性から課外活動として創作ミュージカル活動を開始したが、その後、10科目の実技科目と連携した授業として展開され、現在に至っている。

これらの演目内容は子どもを対象としたものと、いわゆる学生の身の丈のものである二種類に大別できる。また既成の台本・楽曲を用いた作品よりも創作ミュージカルや創作オペレッタの実践例が多数見られることも特徴である。そしてこれらの実践は最終学年度の授業科目として行われることが共通している。

2-3 ミュージカルに期待される教育的効果

ミュージカルの起源はオペラやオペレッタと同じくして、その後アメリカの文化や嗜好を取り入れながら発展してきた。1つのプロットを中心に、音楽、舞踊と装置、照明を含む舞台効果などが総て一体となる総合舞台芸術である。

保育者養成校におけるミュージカルの種類は内容の面から、既成のプロットや音楽を使用する場合と創作ミュージカルの二つに大別できる。既成作品上演の場合、その作品解釈に基づいて表現方法や上演方法が表現者に委ねられるものとなる。それに対して創作ミュージカルでは、題材設定からオリジナリティーが求められ、既成作品上演よりもはるかに自己の内面性を表現できる幅や

深さが増す。しかし後者の問題点は、経験が浅い者が行う場合、表現したい意欲はあるものの、その技術・方法が未熟であるために稚拙な表現になり易いことである。それをサポートするのが指導者の役割であるが、指導者の介入する割合が増せば増すほど、指導者自身の表現に近づくことになる。そのため出演者自身の表現とかけ離れないようにすることに留意が必要である。

このようなミュージカル活動では、作品を作り上げるという一つの目的に向かうことを通して、自分の与えられた役割を果たし、同時に仲間と協力して表現することを試行錯誤する。そして自分の与えられた役割を果たした上で、その他の役割を自ら探求する段階に至る。これらの行為は、他者認識や自己認識力が深まる過程と考えられる。

また公演を迎えるまでは、作品に対する思いや解釈、その表現についてメンバーやスタッフ、指導者が対峙する関係において切磋琢磨する。しかし公演ではそれまでの対峙する関係が同士と変化し、観客と対峙する関係になる。いわばミュージカルに関係するメンバーやスタッフが「全てが一つになる瞬間」なのである。そのために「仲間」や「一体感」をより強く感じられるのではないだろうかと考えられる。公演の場での観客の反応や拍手は、作品上演に対する評価である。このようにミュージカルに関わったメンバーやスタッフ全員が直に評価を感じられることも、魅力の一つである。

またミュージカルは集団で成り立つものであるため、個人の失敗による挫折感を感じにくいメリットもある。このような作品制作の過程は学習者の能動的な学修活動であるアクティブ・ラーニング⁴の要素を多分に含んでいると考えられる。また、指導者が介入する割合によってミュージカルの能動性や規模に対しての臨機応変な対応が出来ることも、総合表現活動としての可能性の一つであろう。

3 授業実践「ミュージカル」

次に、初学者に基礎技術を身に付けつつ同時に表現力をつけさせるための授業実践について報告する。

3-1 実践の概要

ここでは短期大学部2年次後期の専門選択科目として、2014年度に開講した科目「ミュージカル」の概要について述べる。この年の受講生は7名であり、データとしては少ないが、受講理由はミュージカルに興味関心があることであった。また受講生の経験値としてはミュージカルの三要素である「歌唱」「舞踊」「演劇」のうち、合唱として「歌唱」を全員が経験しており、受講生の約半

数が中学・高等学校時の部活動として「演劇」を経験していた。また「舞踊」に関しては、文化祭のダンスとして全員が経験していた。

授業計画は、基礎練習期間と修了公演演目練習期間の二つを設定した。基礎練習期間は、ミュージカルに必要な基礎歌唱法を重点的に指導することが目的である。受講生の歌唱能力に関しては、一人で躊躇なく歌える学生が少なく、発声法や呼吸法については全員が教育を受けた経験が無かった。そのため、いわゆる名作と言われているミュージカルナンバーを用いて、呼吸法や発声法などの歌唱基礎練習を行いつつ、ミュージカルの世界に触れるための選曲を行った。選曲の留意点は次の二点である。

- ・学生の声域に合う楽曲。
- ・息の流れやすいフレーズ感があり無理な発声にならず、歌唱する充実感を得られる楽曲。

受講生はこれらのナンバーを通して基礎練習を重ねるうちに、次第に恥ずかしがらずに発声し、歌唱するようになり、同時に学生間の意思の疎通が自然にできるようになった。また人前で抵抗なく歌唱できるようになると、自分の意見や感想を述べる言葉や、表情・しぐさなどの感情表現が自然に表せるようになった。授業において基礎練習のために取り上げたナンバーは、以下の通りである。

- ①The Sound of Music (ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」から)
- ②Tonight (ミュージカル「ウェストサイド物語」から)
- ③I Could Have Danced All Night (ミュージカル「マイ・フェア・レディ」から)
- ④Hail Holy Queen (映画「天使にラブソングを…」から)
- ⑤Let it go～ありのまま(映画「アナと雪の女王」から)

修了公演演目期間の目的は、学生が持つ羞恥心や限界といった殻を破らせることにより、主体的に表現する醍醐味を味わわせることである。修了公演演目は、様々なキャラクターが登場する「Cats」⁵に設定した。それは受講生一人ひとりの個性を表現しやすく、歌唱技術力の差に対応しやすい作品のためである。また、限られた授業時間であることからメドレー形式で上演することにした。練習初期段階ではこのミュージカルナンバーを全員で歌唱練習し、学生たちの様子を見ながら受講生全員が必ず一か所以上を受け持つようにソロパートを作成した。これは独唱という演奏形態が受講生個々の主体的な表現を最も行いやすい形と考えたからである。しかし負担によって自信を喪失することもあるため、受講生の力量に応じて音域やフレーズの長さ、登場順序等についても考慮した。また、特定のキャストに関わるナンバーにおいてのソロパート作成は、指導者の内的表現を受講生へ強

制することであり、受講生の創造性や自主性の芽を摘んでしまうと考えた。そのためソロパートの設定を全キャストが関わる序曲、最終曲に限定した。このソロパートを設定したことにより、受講生たちは自主練習を始めるようになった。そして受講生が自分たちでキャストを決め、キャラクター作りを始めた。また演出効果を高めるために、演奏形態の人数編成に変化を付けて演目全体を構成した。

そして修了演奏演目のナンバーを一通り練習したのちに、曲想を切り替える練習のために歌唱のみの通し稽古を行った。その後、それぞれのナンバーの振付作業に取り組んだ。その際受講生はイメージ作成のためにミュージカル「Cats」の映像資料を参考にして、ナンバーの振付作業に取り組んだ。受講生の振付をより効果的な表現にするために、舞台空間の使い方と観客の視線の集め方について助言した。ナンバーに振付けが加わると、一時的に意識が動作へ集中するため、歌唱表現レベルが低下するが、その振付けがナンバーの心情や情景と合致したものであればあるほど、歌唱技術と表現レベルが同時に向上する。そのために振付けと歌唱による表現方法を何度も試行錯誤しながら決定した。全ナンバーの振付け決定後、場面をつなぐブリッジの音楽の振付けを行い、全体のバランス構成を調整した。この修了公演「Cats メドレー」において取り上げたミュージカルナンバーは以下の通りである。

- ①Overture 序曲
- ②Prologue:Jellicle Songs for Jellicle Cats ジェリクルソング
- ③Old Deuteronomy デュトロノミー（長老猫）
- ④Skimbleshanks:the Railway Cat スキンブルシャンクス（鉄道猫）
- ⑤Memory メモリー
- ⑥The Journey to the Heaviside Layer 天上への旅
- ⑦The Ad-dressing of Cats 猫からのごあいさつ

以上の出演キャストの他に、ミュージカル上演に関わる多くの役割がある。今回は、ピアノ伴奏、大道具制作、公演記録は本学教職員が行った。それ以外において、楽曲中におけるウィンドチャイムやホイッスル等の効果音、振付、衣装、小道具、プログラム作成、招待状作成等は受講生で分担をした。

3-2 実践の結果と考察

前項での授業実践による結果について、資料を基に考察する。使用する資料は、授業の様子を記録した指導記録、学生の様子を記した研究ノート、修了公演後に実施した受講者アンケート⁶である。

(1) 基礎歌唱技術の重点的な指導

基礎練習期間から修了公演当日までの練習時に一貫して行ってきたことは呼吸法、発声練習である。一人で自立して歌唱表現するためには、この基礎練習は最も大切なことである。この練習は繰り返すことにより、身体に覚え込ませる必要があるため、特に基礎練習期間においては授業時間の1/3～1/2を費やし、個別指導も取り入れながら行った。受講生は基礎練習方法を習得し、授業外での自主練習時や公演当日にも自主的に行っていた。また発声練習を十分に行うことによって、声を出すことに対する抵抗感が薄れていく様子が窺えた。受講生Aは率先して呼吸法、発声練習に取り組んでいた。はじめは意欲が強すぎて顎や肩に余分な力が入り、歌唱最高音がd²であった。ミュージカルの授業の中で一番苦しかった時期について「高い難しいフレーズが歌えなかった頃」と彼女自身が答えている。練習を重ねるうちに脱力することを覚え、声域が広がった。また時期を同じくして「自分が、自分が」という言動が少なくなった。

受講生Bは小学生の時からピアノを習っており、音楽は習得している。しかし非常に羞恥心が強く、人前では十分に表現を披露できないことが多い。はじめは恥ずかしい気持ちが先に立ち、一人で発声することができなかった。練習を重ねるうちに一人で発声できるようになったものの、ロングトーンや高音域の発声において途中で諦めてしまう傾向が見られた。

受講生Cは中・高校生時代に吹奏楽部へ所属しており、音楽の経験は比較的長いほうである。しかし多くの場面において自分に自信が無い様子が見受けられ、基礎練習期間の初期には発声することができなかった。猫背で内股の姿勢にも自信の無さが表れているようであった。発声練習時に姿勢を正すことから始め、次第に小さな歌声を発することが出来るようになり、胸を張った姿勢を保てられるようになった。

(2) 主体的な表現を創り出す過程

授業実践で最も留意したことは、授業の雰囲気作りである。素の自分自身を晒し出しても受け止めてもらえる安心感を作るために、受講生の歌唱技術や表現否定しないことと、楽しい雰囲気作りに配慮した。基礎練習の積み重ねにより、徐々に自信を持ち表現することに対して抵抗感が薄れて行った。それは声量や、ロングトーンの長さ、高音域の発声に対する意欲などに表われた。また授業時の受講生同士のパーソナルスペースの広さにも表われ、肩が触れ合うほどの近い距離で歌唱していた受講生が、次第に個々の距離を広く保てるようになった。また振付けや演出のために、多くの意見交換や自主練習が

行われ、主体的な表現に対する思い入れが強くなった。大道具や小道具、照明に関する要望が出されたのがこの時期である。受講生アンケートには、作品制作に向けての共同作業に楽しみを感じている記述が多く、他の受講生の上達する様子を喜ぶ記述もあった。

受講生Aは常に全力で表現していたが、練習を重ねるうちに余分な力を抜くことを覚えた。すると、自己の内面性をより表現でき、相手へ伝え易くなることに気が付いた。アンケートの中では「歌うことがより楽しくなった。大勢の中で一人目立つことが好きだけど責任が重くて苦手だった。以前は頼まれればやるくらいの気持ちしか持てなかったが、今は自分からどんどんやりたいなあと思えるようになった。」と述べており、力を抜く大切さを体得したことが窺える。歌唱基礎技術を身に付けたことで、表現の強弱や柔軟が可能となり、表現域の拡大へ繋がった。

受講生Cは基礎練習期間を通じて姿勢等の変化が見られたが、修了公演演目の中で短いソロパートを担当することになってから、更に表情豊かになり、眉や頬を上げて歌唱することができるようになった。また常に脇を締めた固い振付け動作であったが、次第に両手を大きく広げられ、身体を開くことができるようになった。その影響で発声の支えが定まり、充実した響きでの低音域の発声になった。また、他メンバーの歌声を聴き、それに合わせられるようにもなった。「自分がどのくらいできるかわからないけど楽しかった。やるまではどうなるかわからなかったけどできて良かった。」と感想を述べており、自分の予想を超えた喜びが受け取れる。

(3) 修了公演における主体的な自己表現と自己評価

修了公演に向けて、受講生全員で協力し一つの作品を作り上げて行った結果、連帯感が生まれ作品全体における表現が大きくなった。それが自信に繋がり、修了公演では自分の納得いく表現ができたようである。アンケートでは受講生全員がおおむね「自分を思い切り表現できた」と答えている。また観客に拍手をもらうことにより、努力が認められて報われたと感じたのではないだろうか。またアンケートでは、皆で頑張れたことに対する記述が多数あり、受講生個々ではなく受講生全員で成し遂げたという満足感が受け取れる。それらが人前で演ずる楽しさを感じることに繋がったことが窺える。このミュージカル経験の影響力として「自分の自信につながると思う。何にでもチャレンジしてみようという気持ちが育ったので、これからの仕事にそれを生かせると思う。」という感想に表われている。

しかしソロパートの部分では、練習で成功していた箇所

所が修了公演で失敗して悔しい思いを感じた学生もいた。受講生Bは修了公演演目を練習しているうちに、次第に自信をもって歌唱することができるようになってきた。しかし声区変換で高音の響きが前に飛ばず「呑んだ」声になる傾向があった。修了公演直前にやっと前へ響きを飛ばせるようになったものの、公演では緊張して元の響きの声に戻ってしまった。しかし彼女は「皆で頑張ったことを人前で発表する勇気がでて、新しい自分に出会えた気がする。」と述べている。この修了公演での達成感、様々な問題を解決し同一の最終目標へ受講生全員で向かったことにより、個人だけではなく受講生全員による問題解決学習になったと感じる。

4 実践の省察と今後の課題

ミュージカルの授業実践を通して、保育者養成校における学生の表現力育成について考察した。

2014年度に開講された科目「ミュージカル」は半期15回という短期間ではあったが、この総合表現活動の経験を通して、歌唱表現を主とした表現技術力と同時に人間力を育てることが確認された。それは総合表現作品の制作過程から最終的な上演時までにはわたっていた。このように総合表現活動は、それぞれの表現技術力のみならず、総合的な人間力である生きる力を成長させる教育力を持っている。

中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(2012.8.28)において、21世紀を生き抜くための力の養成として、大学教育の段階では課題探求能力が掲げられ、教員に求められる資質能力の一つとして、総合的な人間力が挙げられている。総合的な人間力では、豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域等と連携・協働する力、が具体的に明記されている。この五つの能力は、総合表現活動で育まれる能力と関連していることが考えられる。

保育者養成校には、専門的な知識や技術を身に付けるだけでなく、その習得過程において同時に人間力を育むことが求められていると考える。殊に2年間という短期間での養成校における学びは、発見学習、問題解決学習、体験学習などによる教育が大変効果的であろうと感じる。

しかし表現力育成において、今回の授業実践は教員主導のもと、学生たちが限られた範囲内での歌唱表現を中心とした表現活動になった。これはミュージカル三要素のうちの一部に過ぎない。今回の授業実践中で音楽的表現が深まってきた際に、受講生から大道具や照明などの

舞台装置に対する表現意欲の言動が見られた。しかし時間的制約や指導力不足等のため、満足に授業内で取り扱うことができず、受講生の表現力を制限することになった。本来のミュージカルは、構成する主な三要素以外にも多くのものがある。ミュージカル作品制作の最終段階では、それぞれの要素で培われた表現力が相互に作用し合い想定以上の表現効果が生み出される。それらを体験することによって育まれる表現力や教育効果は大きい。ミュージカルによって表現力を最大限に引き出すためには、人的条件や物的条件、また時間的条件などの関係もあるが、教員主導から徐々に学生主導へとシフトをチェンジしていけるような授業展開を今後は追求していきたいと考える。そして更に総合表現活動を通して学生を育成するためには、他科目との連携も視野に入れた多角的な表現活動へ展開していくことが必要である。そのための総合演習的なカリキュラムの検討や、総合表現活動をより効果的に行うためにアクティブ・ラーニングをどの段階でどのように用いるかなどの活用方法を研究課題として探求していきたい。

注釈：

1. 東海学院大学短期大学部幼児教育学科でのピアノ初学者の割合は、2012年度入学生41%、2013年度入学生55%、2014年度入学生30%、2015年度入学生30%である
2. 「21世紀の地方文化を担う子どもたちの育成事業・こどもミュージカル」運動をきっかけに、官民共同の育成委員会の下、1993年から活動をしている。小学3年生から中学2年生までの子どもたちが入団オーディション後、二年間の育成期間を経て修了公演の舞台に立つ。練習は「歌唱」「舞踊」「演技」の三部門に分かれて行われ、筆者は歌唱指導として携わっている。
3. 『コミュニケーション教育推進会議審議経過報告』(2011年8月29日)の中で、子どもたちへの効果として「(ア)他者認識、自己認識の力の向上 (イ)「伝える力」の向上 (ウ)自己肯定感と自身の醸成 (エ)学習環境の改善」と報告されている。
4. 学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学習者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(2012.8.28)において提示された。
5. A.L.Webber作曲 T.S.Eriotによる詩集「おとぼけじいさんの猫行状記」をミュージカル化したもの。登場する様々な猫のエピソードがスキットとして積み重ねられて舞台が進行する作品である。
6. アンケート対象は本学幼児教育学科2年「ミュージカル」受講生7名。質問紙によるアンケート調査を2017年2月に実施した。

文献：

- 内山尚美 (2014)「ミュージカル活動が育むもの—磐田こどもミュージカルの活動事例から—」『音楽表現学』第12巻, pp115.
- 奥忍 (1984)「日常語に根ざした音楽学習—奈良方言による創作ミュージカル「かさじぞう」—」『奈良教育大学教育研究所紀要』第20号, pp.103-122.
- 紙屋信義 (2003)「保育者養成における子どもミュージカル発表の実際—付属幼稚園での「こぶとりじいさん」の実践を通して—」『千葉大学教育学部研究紀要』第51巻, pp307-311.
- 芝邦夫 (1984)「プロドウェイ・ミュージカル事典」劇書房.
- 時得紀子・小町谷聖 (2009)「総合表現活動のもたらすもの—上越教育大学付属中学校「表現創造科」の実践から—」『上越教育大学研究紀要』第28巻, pp243-256.
- 土門裕之・山田克己 (2006)「創作ミュージカル活動の実践—課外活動から授業化に至るまでの変遷と改革」『音楽教育実践ジャーナル』第3巻(2), pp63-69.
- 福井一・太田垣学 (1998)「総合的表現教科としての「ミュージカル」」『奈良教育大学紀要』第47巻第1号, pp65-72.
- 細田淳子 (1995)「子どもの声域とTVアニメ主題歌」『東京家政大学研究紀要』第35集(1), pp.189-195.
- 升田真依子 (2015)「山本壽の唱歌劇に関する研究」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』第17号, pp87-95.
- 望木郁代 (2010)「創作ミュージカルによる教育効果の実証的研究」『保育士養成研究』第28巻, pp31-40.
- 文部科学省 (2011)「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」
- 文部科学省 (2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」
- 山本学 (2009)「教育現場と教員養成校における音楽劇・オペレッタの教育的意義についての考察」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第44号, pp97-105.

Teaching Integrated Expression Activity Courses in Nursery School Teacher Training Programs

Through the Class Production of a "Musical"

UCHIYAMA, Naomi

Abstract

Many nursery schools, kindergartens, and early childhood education schools present music dramas, operettas, and musicals as a general expression activity. The musical skill demanded of teachers in nursery schools and kindergartens is the ability to support the music expression of children. However, the content of the music classes in nursery teacher training school are mainly musicality and music techniques, and few reach as far as methods of teaching music expression. This report examines a method of cultivating self-expression skills in nursery teacher training schools through the class production of a "musical."

Keywords : music expression, musical, nursery school teacher training

— 2015.7.8 受稿、2015.11.26 受理 —